

Acta Neurochirurgica, Supplementum 25

Glossary of Neurotraumatology

Edited by

E. S. Gurdjian, J. Brihayé, J. C. Christensen,

R. A. Frowein, S. Lindgren, W. Luyendijk,

G. Norlén, A. K. Ommaya, I. Oprescu,

A. de Vasconcellos Marques, R. P. Vigouroux

Springer-Verlag 1979

脳神経外傷学の語彙集としての本冊子は、脳神経外科領域のの著名人達によって編集されたものであり、米国、ベルギー、アルゼンチン、西独、スウェーデン、オランダ、ルーマニア、ポルトガル、フランスの計9カ国からの委員により、2年がかりで作られた。内容は、国際語としての英語による項目をアルファベット順に並べ、それに対応する語を独語、西語、仏語の順に併記している。内容の一部は Clinical Neurosurgery Vol. 12, 1966に発表されたものからもとり入れられている。

本冊子の特徴は、今迄に明確にされていなかった、あるいは多義的に用いられていた言葉を統一しようとしたところにあると考える。しかし、“意識”の定義に関して、“覚醒していて、自己の認識と外界に対する適切な反応をしうること”と妥当なものになっているが、“意識障害, clouding of conscious state”に関しては、“なお討議を要する”としている。おそらく意識障害の分類 (Mayo clinicの分類, Glasgo coma scale, 3-3-9度方式など多くのものが提唱されているが)に関して、意見の一致をみなかったものと推測される。“意識”の定義を前述のようにきめると、最良とされている Glasgow coma scaleも部分的にしかあてはまらなくなってしまうのは当然のことと考える。

用語、用法で統一もしくは区別を明確にしたものとして head injury を craniocerebral injury とし、open brain injury, open skull fracture の項目に分けて、それぞれ脳実質、頭蓋骨が外界と交通したものと定義することにより、open head injury や compound skull fracture などの用語を避けて、分り易くなっている。また hydrocephalus ex vacuo の用語は四カ国語で使用しないことにし、neuroma は新生物には使用しないことで合意し、arachnitis は arachnoiditis に統一している。しかし、post-traumatic neck syndrome として occipital or suboccipital neuralgia or neuritis, tension headache, cervical tension syndrome, cervical myospasm を英語、西語で同義語として包含しているが、やや行過ぎという感がある。一方、言語の違いによる用法の違いもあり、brain swelling (英), Hirnswellung (独) と同系統の用語に対し、同意義の脳容積増大を意味する語として edema (西), oedème (仏) が用いられている。また concussion に対し、英語、西語、仏語では種々の程度の神経脱落症状がありうるとするが、独語では神経脱落症状のあるものは contusion とする。同様の傾向として myelitis に対し、独語では contusion, haemorrhage, cord section などの現象は含まれないとしている。独語の特徴として、精神活動に関する語に対し、可逆性のもは Durchgangssyndrom (Wiek, 1956) であるとし、Wesenveränderung はこれに含まれていない。例えば、dementia (この定義も曖昧であるが)、personality disorder に相当するものは、独語では部分的または完全回復をするものではなく、可逆性のもとは厳密に区別すべきものであるとしている。仏語の特徴としては、英語に相当する語がなく (syndrome subjectif post-traumatique (仏) = post-traumatic-, postconcussion-, cervical tension-syndrome (英) など) 他の項目を見るようにとの指示が多い。いずれにしても、僅か200項目余の語彙集ではあるが、それぞれの国の伝統に従った言語の意義を統一するのは大変な困難と努力を伴ったであろうと考える。 (堀江 武)